



高尾商店街を練り歩く「そば行列」



御本尊様へお蕎麦が奉納される

例年高尾山周辺のおそば屋さんでは、高尾山名物の「とろろそば」をアピールする、「高尾山冬そばキャンペーン」が二月の下旬から三月の末日まで行われております。本年で十五回目を迎え、現在では十九のお店が参加されています。

そのキャンペーンの一環として二月十九日に山麓の不動院にて、「そば奉納の儀」が行われました。

山伏を先頭に不動院まで、冬そばキャンペーン実行委員会(会長・峰尾孚)の皆様が練行し、不動院にて菅谷執事長に実行委員会々々長より「手打ちそば」が献上され、御本尊様の御宝前に供えられました。その後、新年のそばや自然薯などの豊作を祈る奉納式が行われました。

そばと自然薯の豊作を祈る

# 高尾山そば奉納式 (二月十九日)

**富士登拝代参守のご案内**

この代参守は、高尾山から続く祈りの道を、修験者によって運ばれ、霊峰富士山頂にて法楽し、本年一年の、諸縁吉祥・諸願円満の為に、ご祈念致します。

(授与料) 一体壹千円以上  
(代参守と碑伝合わせて) <申し込み方法>

山上・御護摩受付所又は、葉書に郵便番号・住所・氏名(必ずフリガナを明記下さい)。電話番号を明記の上、左記までお申し込み下さい。

※締め切は、七月末日とし、八月以降の申し込みは、来年度分とさせていただきます

〒一九三―八六八六  
八王子市高尾町二一七七  
大本山高尾山薬王院内  
富士事務局

「地蔵菩薩発心因縁」王経(地蔵十王経)であり、その思想的な根拠となったのが本地垂迹説である。

本地垂迹とは、日本古来の八百万の神々は仏教の仏菩薩が化身となつてこの世に現れたとする思想で、春日権現の本地を薬師如来や地蔵尊としたり、高尾山薬王院の飯繩権現の本地を地蔵尊や大日如来とするものである。権化・権現とは仮の姿、本地とは本来の姿をいふ。「地蔵十王経」では、この思想が十王にも当てはめられ、道教的な王もすべて仏教の仏菩薩を本地とするにいたつた。なかでも人の死後三十五日目に現れる閻魔王の本地が地蔵尊とされることになり、地蔵・閻魔は一体となった。三十五日法要に地蔵尊を本尊として廻向するのは、厳しい閻魔王が本来の優しい地蔵尊となつて亡者を救つてもらいたいという遺族の願いも込められている。

# 地蔵尊の宗教 ⑤

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

## 地蔵尊と閻魔王は同一のほとけ

これまで見てきたように、地蔵の主宰者は閻魔王であった。この思想はインド仏教においても、道教と習合した漢民族の仏教においても同様である。そうした「先任者」閻魔王のいる地獄に地蔵尊が



ブータンのプナカ・ゾン寺の壁に描かれた六道輪廻図。六道の輪を閻魔王がかかえてる。  
© 2013 金岡秀郎 『文学・美術に見る仏教の生死観』(NHK出版)

現れるようになった理由は何か。地蔵尊の功德を説いた「地蔵本願経」には、「百万億の世界にこの身形を分かち、一切業報の衆生を救拔す。(中略)阿逸多の成仏に至らんより已來の六道の衆生を度

脱せしめん」とある。これを解釈すると、地蔵尊は「無数の分身を現わして百万億の世界に行つて、業の報を受けている衆生を救う。未来の仏である弥勒仏がこの世に現れるまでは地蔵尊が六道で苦しむ衆生を解脱させる」ということである。

つまり、地蔵尊は苦しむ衆生のためにどこにでも現れると説かれている。このことから地蔵尊は六道能化のほとけと称される。この思想をもとに日本各地に石造の六地藏が建立されたりした。

ここからいう六道とは、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の六つの世界を意味する。生きとし生けるものが生まれ変わりに死に変わることを輪廻転生といひ、これが六つの世界で起こるこ

とから六道輪廻という。六道能化とは、六道において衆生を救い導く仏菩薩で、まさに地蔵尊の深く広い慈悲を示している。六道のうち、人道はわれわれ人間の住んでいる世界であり、地獄は業の報いによつて亡者が墮ちた世界である。仏教の地獄(ナラカ)はキリスト教の地獄(ヘル)と違い、そこで死ねば再び同じ地獄か他の世界へ転生する。本連載の第三回に見たように、閻魔王は地獄の亡者を手助けし、来世には人道や天道などよりよき世界に生まれ変わるようしてくださるほとけであった。

六道のうち地獄・餓鬼・畜生の三つは三惡道とされ、地蔵尊はとくに衆生の「三惡道の苦を救う(地蔵本願経)」とされている。地蔵尊が六道能化とされながら、最も強く地獄道と結びついたゆえんである。そもそも地蔵尊は大地のほとけで

あり、大地の底の地獄と結びつくのは必然であった。こうして地蔵尊は地獄に墮ちた人々を救うために地獄に赴いたが、そこは以前より閻魔王の世界である。とすると、地獄の主宰者、主人公は閻魔王なのか地蔵尊なのか。両者はどういふ関係や役割があるのか。不都合とは言わぬまでも、こうした疑問が出るのは当然である。

このことを解決したのは、日本の仏教であった。先に見た「佛説閻羅王授記四衆逆修生七往生淨土經」は唐で成立したとされる経典で、死者は七日ごとに十人の王の裁きを受けるから、遺族が七日ごとの法要である生七齋をしなければならぬとする。この経典は日本にもたらされ、死者廻向、とくに年回法要を盛んにする根拠となった。とはいへ、閻魔王を除くと十王は日本人に馴染がない。十王思想を仏教的に整えたのが日本で作られたとされ